

中学生における罪悪感、恥の認知・生理・行動的反応

有光 興記

(駒澤大学文学部)

中高生における罪悪感や恥については、石川・内山(2002)、稲葉(2004)、永房(2005)が検討し、状況の特徴や特性について明確にされた。中高生の罪悪感と恥の経験については、有光(2006:発達心)が調査を行い、罪悪感に関しては中学生において他傷、高校生では利己的行為が多く記述され、恥に関しては、ハジが一貫して多く、テレが高校生で多く記述されたことを明らかにした。本研究では、有光(2006)のデータ分析の続報として罪悪感、恥における認知・生理・行動的反応に関する結果を報告したい。

方法

調査対象者 公立中学校に在籍する生徒 748 名(平均年齢:13.3 歳, SD=0.9)。学年、性別の内訳は、中 1 : 男 131 名、女 112 名、中 2 : 男 127 名、女 124 名、中 3 : 男 132 名、女 122 名であった。

質問紙 罪悪感、恥の経験の頻度を 4 件法で質問した後、罪悪感、恥(はずかしさ)に関する経験を 1 つ想起させ自由記述させた。さらに、その経験における気持ち、身体の変化、その後の行動(感じた後、何かしたか)についても自由記述させた。記名はさせなかった。

手続き 担任教師が授業中に実施、回収した。回収時には封筒に入れるように指示した。

結果および考察

分析方法 記述された経験数は罪悪感が 499、恥が 429 であった。経験の記述があり、気持ち、身体的変化とその後の行動への質問にも回答された記述から研究者 1 名がカテゴリー作成し、分類した。

身体、気持ちの変化 罪悪感は身体: 140、気持ち: 416 個、恥は身体: 240、気持ち: 280 個の回答を得た。身体的変化については、罪悪感はなし(47.9%)、生理的反応(25.7%)、体調不良(18.6%)、恥はなし(23.3%)、赤面(22.5%)、体が熱い(17.1%)の順に多かった。気持ちの変化については、罪悪感はいいことをした(25.5%)、後悔(16.6%)、なし(15.9%)、恥は恥ずかしい(31.8%)、なし(20.7%)、逃避欲求(9.6%)の順に多かった。恥は生理的反応が顕著であり、罪悪感はい責の念が強いことが分かった。学年差は認められなかった。

経験後の行動(表 1, 表 2) 罪悪感、恥ともに「何もしなかった」という回答が多く、行動的变化が必ずしも伴わない可能性が考えられた。罪悪感については、謝罪、改善、補償が多く、対人関係維持に関連した行動が喚起されていた。恥については改善、回避、笑うが多く、行動を修正しようとする一方、回避行動も多いことが分かった。なお、学年による差は見られなかった。

付記: 本研究は、文部科学省科学研究費補助金 (#16730339、代表者: 有光興記) の助成を受けて行われた。

表 1 罪悪感に伴う行動の分類結果^{注)}

尺度	中 1	中 2	中 3	合計
謝罪	77 (46.7)	74 (47.7)	77 (44.3)	228
なし	44 (26.7)	38 (24.5)	46 (26.4)	128
改善	18 (10.9)	14 (9.0)	13 (7.5)	45
補償	11 (6.7)	13 (8.4)	14 (8.0)	38
反省	5 (3.0)	5 (3.2)	5 (2.9)	15
開示	4 (2.4)	2 (1.3)	7 (4.0)	13
実行不能	4 (2.4)	3 (1.9)	4 (2.3)	11
逃避	0 (0.0)	4 (2.6)	7 (4.0)	11
その他	2 (1.2)	2 (1.3)	1 (0.6)	5
合計	165	155	174	494

注) () 内は、学年に占める割合。

表 2 恥に伴う行動の分類結果^{注)}

尺度	中 1	中 2	中 3	合計
なし	82 (60.7)	74 (52.1)	87 (54.7)	243
改善	8 (5.9)	10 (7.0)	16 (10.1)	34
回避	6 (4.4)	11 (7.7)	10 (6.3)	27
笑う	7 (5.2)	8 (5.6)	10 (6.3)	25
身体対処	8 (5.9)	9 (6.3)	8 (5.0)	25
逃避	3 (2.2)	7 (4.9)	6 (3.8)	16
正当化	6 (4.4)	4 (2.8)	4 (2.5)	14
反省	4 (3.0)	8 (5.6)	1 (0.6)	13
その他	11 (8.1)	11 (7.7)	17 (10.7)	39
合計	135	142	159	436

注) () 内は、学年に占める割合。